

vol.01-08

ダイジェスト版

【 酒場詩人・吉田類 責任編集 】

旅人類

大人の好奇心を
満たす旅へ



旅人
類

〔たびびんるい〕

vol.01-08 ダイジェスト版

2022年3月26日発行

企画・発行:株式会社 ドー・コン 札幌市中央区大通西4丁目1番地 新大通ビル TEL.011-801-1565

TAKE FREE

北海道の旅情報

HOKKAIDO LOVE!

LINE公式アカウント

お友だち募集中!

北海道の
観光情報・お得な
情報を配信中!



今すぐ簡単登録!

1. LINEアプリを起動
2. 右記QRコードをコードリーダーを立ち上げ読み取る
3. LINE公式アカウントを登録
4. 登録完了! キュンちゃんから北海道の観光情報が届くよ♪



北海道公式観光サイト
HOKKAIDO LOVE!

北海道公式観光サイトもリニューアルオープン!
絶景やグルメ、文化など北海道の観光情報をチェック!

HOKKAIDO 北海道観光振興機構

配信の主な
コンテンツは
こちら!

毎月30名様に
北海道の特産品が当たる

プレゼントキャンペーン

宿泊券から特産品まで、北海道を感じられる
楽しめる景品を毎月30名様に抽選で当たる
定期的なキャンペーンを実施中です!

宿泊割引やふるさと納税など
お得な情報を配信

お得な情報・キャンペーン情報

北海道地域限定の宿泊割引の配信やアンケートに
答えてゲットするキャンペーン、ふるさと納税など各
種キャンペーンやお得な情報を配信しています!

全道各地の観光情報を
定期的に配信

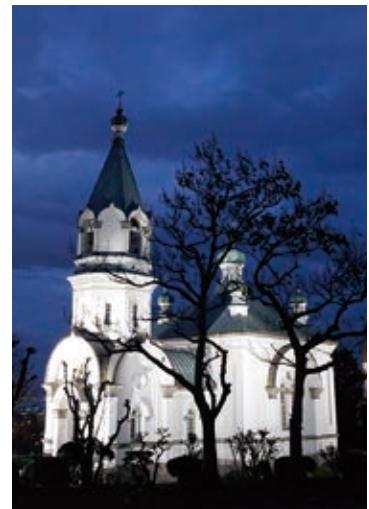
観光情報の配信 旅ログ

キュンちゃんが各地を取材してブログ配信!
定番情報からローカルな内容まで紹介するよ~!

期間限定のイベントなど
旬な情報を配信

観光情報の配信 今が旬

四季折々に様子が変わる北海道の旬な情報を
お届けします! 期間限定のイベント情報や、紅葉
や芝桜などの自然鑑賞のお知らせするよ~!



祈りの際に鳴る鐘の音は、環境省の「残された日本の音風景100選」に選ばれている。



ここで最初に洗礼を受けた日本人の中には、類さんの故郷・土佐出身の沢辺琢磨もいた。

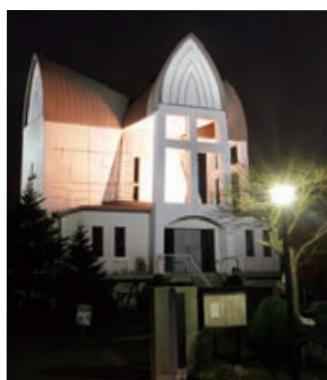
函館ハリストス正教会

函館市元町3-13
TEL.0138-23-7387

祈りの鐘が響く元町へ。



ライトアップされた元町の教会群。



函館 聖ヨハネ教会

昭和54年完成の現代風の外観は、上から見ると十字架に見える。明治7年(1874)に英国のデニング司祭が函館で宣教活動を始めた。

函館市元町3-23
TEL.0138-23-5584
内観公開は4月28日~11月3日
市電「十字街」停留場より徒歩15分

朝食を食べに入った喫茶店の壁に、何気なく飾られていた一枚の古写真が、類さんを惹きつけた。明治23年(1890)の函館市街を、函館山の中腹から見下ろした写真である。わずか22年前まで江戸時代だったとは思えない、それどころか、維新の激しい戦いの舞台だったとは信じられない、賑やかで平和な都会の風景だ。

「この時代、札幌はまだ田舎町で、文化が函館に集まっていた様子が分かりますね。元町の辺りには既に教会も見えます。そうだ、今日は函館の発祥の地でもある元町から歩き始

めることにしましょうか」

十字街まで市電に乗り、並木が美しい二十間坂を登りきつて右を向けば、『カトリック元町教会』を正面から見る格好になる。雄鶏のある百尺の尖塔が最も映える角度だ。

このゴシック様式の塔と道一本を隔てて、ロシア風建築の『函館ハリストス正教会』があり、その隣には『函館聖ヨハネ教会』のモダンな外観が連なるのが面白い。さらに言えば、付近で一番大きな建物は、純和風の仏閣・東別院だ。いかにも日本らしい眺めではないだろうか。



カトリック元町教会

最初の木造の聖堂が創建されたのは明治10年(1877)。二度の焼失を経て、現在の建物は大正13年(1924)に再建されたもの。聖堂内の祭壇は、再建時にローマ法王から贈られた。

函館市元町15-30 TEL.0138-22-6877

10:00~16:00

無休(日曜の午前中、礼拝時、聖堂使用時は見学不可)
拝観料/無料 市電「十字街」停留場より徒歩10分



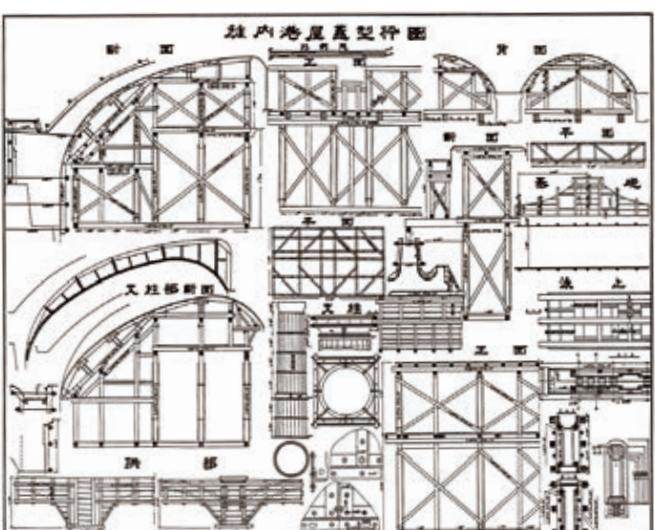
その昔、
樺太に渡る人々は、
稚内で汽車から
連絡船に乗り換えた。



現在の稚内駅。かつて防波堤ドームまで伸びていた鉄路はもうない。



昭和13年(1938)頃の稚内桟橋駅と稚泊航路乗船出入口。(稚内開発建設部提供)



ドームの屋根に滑らかな曲線を出すための木枠の設計図。(稚内開発建設部提供)

当初の桟橋にはドームがなく、人や車両には強風と波が容赦なく襲い掛かった。はつきりとした記録はな言い伝えられている。様々な安全対策が検討された結果、ドーム型の屋根で覆うことが計画された。北海道庁が若干26歳の若き技師、土谷実にその設計を命じたのは、昭和6年(1931)1月。着工期日まで3カ月しかなかったが、彼は見事にやつてのけた。しかも、それは世界にも類を見ない美しいデザインだった。戦後、連絡船が廃止されると、ドームは石炭置場として一時使われながらも、街の発展の基礎を築いた。歴史遺産として後世に残されることになった。厳しい自然にさらされながらも、街の発展の基礎を築いた。損傷が激しかったが、昭和53年(1978)には原型通りに復元。今も港や駅を風と波から守りながら、市民や観光客に親しまれている。

稚泊航路があつた時代、汽車と船との間を人々が忙しく動き回つていて様子を想像しながら、類さんはドームの歩廊を歩いた。



太い円柱と曲線のフォルムの美しさは、時代を超えて愛され続けている。

そして最北の地へ。 国境の街、稚内を歩く

天塩川の河口から、さらに北に足を延ばす。

日本最北の街、稚内。

海峡を隔ててロシアと国境を接するこの街には、旅人の心の深い部分を掴む、不思議な魅力があった。

終着駅という言葉には、それだけで旅情を誘う力がある。それも、日本の線路の北の果てともなれば、な

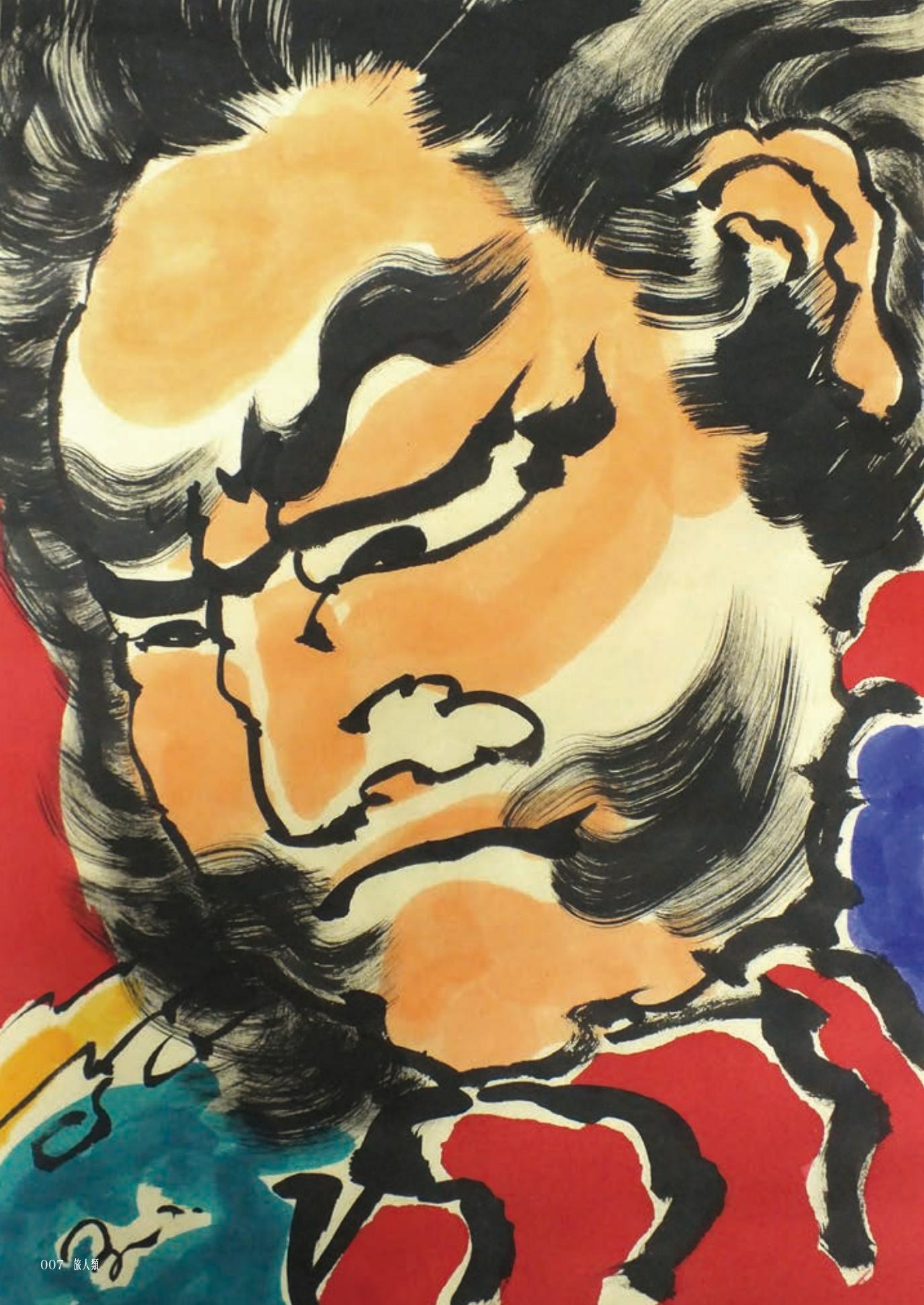
おさらだ。

大正12年(1923)から昭和20年(1945)まで、この駅と樺太の大泊駅(現・コルサコフ駅)とを結ぶ稚泊航路があった。連絡船が

発着した桟橋の名残が、今も古代ギリシア建築の柱廊のような姿を見せる稚内港北防波堤ドーム。往時には、桟橋の先にあつた仮乗降場・稚内桟橋駅まで鉄路が延びていたのだ。

旅人
類
Vol.2

武士の魂が宿る伝統の「津軽兜絵」を描く。



1.まずは職人の溝江さんがお手本を描きながら、兜絵のポイントを教えてくれる。
2.輪郭や顔のパーツを筆で描き、髪や眉、ひげは刷毛を使って描く。
3.歌舞伎の隈取りのように、余白を残して色を付けていくのがコツ。
4.完成！ひげを蓄えた勇壮な武者は、源為朝がモデルなのだと。
(左ページ)類さん作の津軽兜絵。左下には、画家バージョンの類さんのサインが記されている。

津軽藩ねぷた村

青森県弘前市亀甲町61
TEL.0172-39-1511
9:00~17:00 無休
大人550円、中学・高校生350円、
小学生220円、幼児110円
※ショッピングエリアのみ利用の場合は入場無料

「吊りこま」など
約15種類の製作体験を実施。



鮮やかな色漆が雲状に浮かび上がる「津軽塗」や、麻布に幾何学的な刺繡を施した「こぎん刺し」など、さまざまな民芸・工芸品の伝統と技が、今もしっかりと息衝く弘前。「津軽藩ねぷた村」内にある津軽蔵工房「たくみ」では、その製作風景を間近に見学でき、体験も気軽に楽しめる。

今回、類さんが挑戦したのは「津軽兜絵」。もともと津軽藩の下級武士が困窮から逃れるため、手内職として兜を作り、町民たちに売ったのが始まりといわれている。幕末から明治初期にかけて盛んに作られ、浮世絵や三国志などの挿絵を元にした「武者絵」を描くのが特徴だ。

まずは、職人が描いた大首絵を手本に、筆で輪郭や目鼻を描いていく。筆圧を調整しながら「とめ」の点を強調して描くのがポイントなのだが、画家であり、イラストレーターでも

ある類さんは、さすが手練の筆さばき。「力強いタッチで躍动感がありですね。初めてとは思えないですよ」と、職人の溝江由樹さんも脱帽する。筆で墨を入れたら、今度は「牡丹刷毛」と呼ばれる刷毛を使って、髪の毛やひげを描く。徐々に出来上がりの勇壮な武者の顔。向き合う類さんの表情は、一筆ごとに引き締まり、すっかり兜絵の世界の中へ。墨を乾燥させた後は、カラフルな染料を使い、色付けをする。「額や類などは、少し白地を残すと立体感がでますよ」。溝江さんの言葉に頷きつつ、真剣に筆を運ぶ類さん。

完成した兜絵は、雄々しく堂々たる出来栄えで、類さんも「生きているね！」と思わず笑みがこぼれる。津軽兜絵には武士の魂が込められている。そうだが、類さんもその魂を受け継いでいるのかもしれない。

日高を巡る旅人は、山と海の庄倒的な存在を常に感じることになる。

視線を上げれば、北は狩勝峠から南は襟裳岬まで、1500～2000m級の山々が約150kmにわたって連なる日高山脈。北海道の背骨と呼ばれるその壯麗な姿から海岸線へ目を移すと、江戸時代から昆布や鮭の好漁場として知られてきた太平洋が、水平線の果てまで伸びやかに広がっている。

豊かな山林がもたらす森林資源、そして日高沖で揚がる海の幸――。

そんな自然の賜物が、この地に生きる人々の暮らしを長く支えてきた。

今回の旅は、日高を象徴する「山と海」をキーワードに始めてみたい。

それはきっと、自然と共に生きる人々の力強さや、この土地が歩んできた歴史を感じるものになるはずだ。

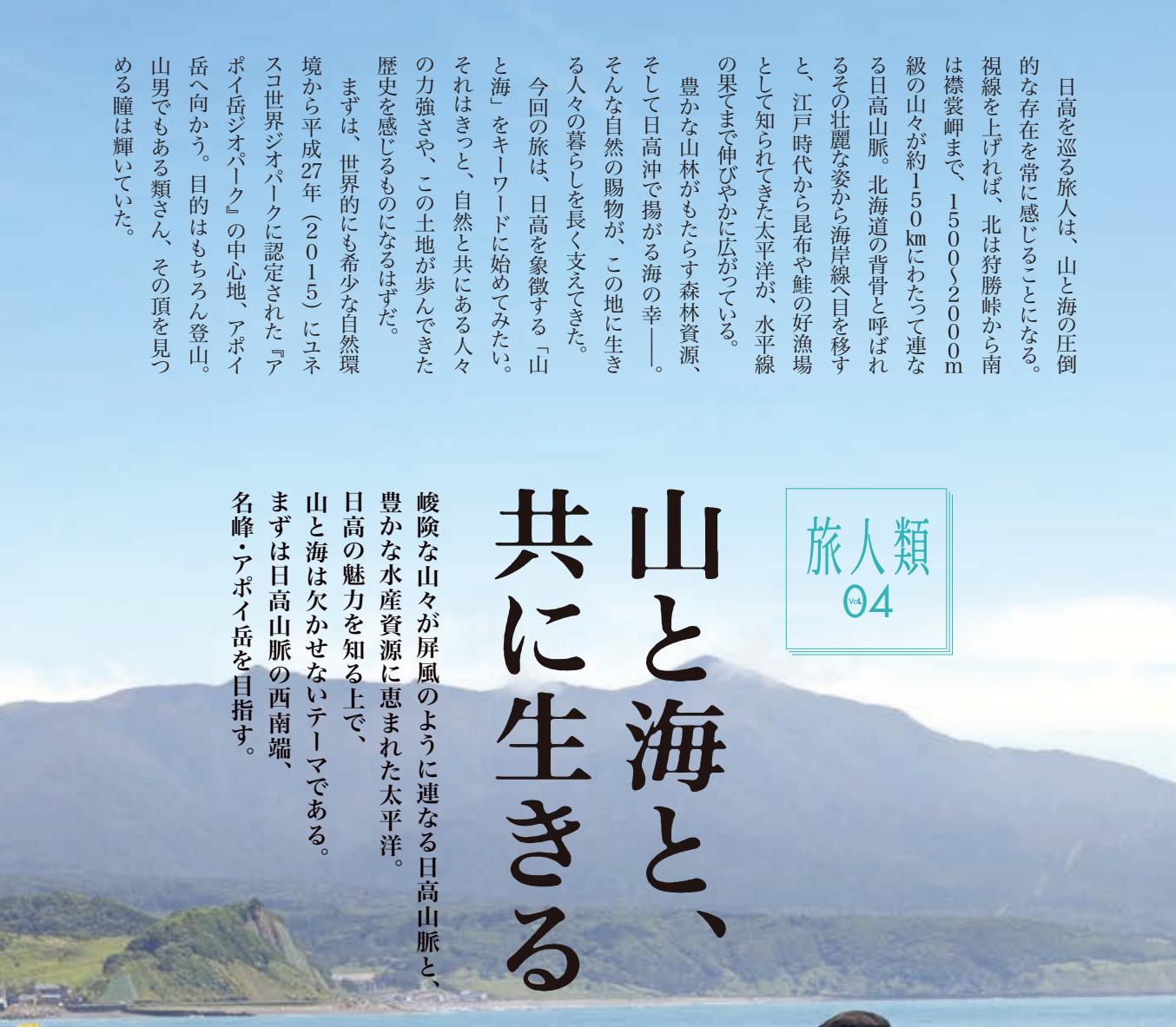
まずは、世界的にも希少な自然環境から平成27年（2015）にユネスコ世界ジオパークに認定された『アポイ岳ジオパーク』の中心地、アポイ岳へ向かう。目的はもちろん登山。

山男でもある類さん、その頂を見つめる瞳は輝いていた。

岳へ向かう。目的はもちろん登山。山男でもある類さん、その頂を見つめる瞳は輝いていた。

山と海と、 共に生きる

旅人
類
04



様似町の海岸から、これまで何度も登頂してきたアポイ岳を遠望する類さん。



実は類さん、これまで何度もアポイ岳に登っている。ガイドを務めてくれる『アポイ岳ジオパークビジターセンター』の学芸員・田中正人さんとも顔なじみで、挨拶もそこそこに登山口へ。田中さんは10歳からアポイ岳に登っているベテランガイドで、既に700回以上は登頂しているという。

「小さい頃からアポイ岳を見上げて育つてきました。様似の人々にとつてはとても身近な存在。故郷の山ですね」と田中さん。

標高810mの山ながら道のりは

長く、山頂まではおよそ2時間半～3時間半。4合目までは緩やかな登りで、林の中をのんびり進んでいく。

歩きながら、田中さんがアポイ岳を希少たらしめる「橄欖岩」について説明をしてくれた。アポイ岳全体を形成する橄欖岩は、地殻下のマントルの一部が約1300万年前のプレート衝突で突き上げられ、地上に出てきたもの。ほとんど変質せず露出している例は珍しく、地球深部の情報を有する貴重な地質として、学



第4休憩所の沢には絶滅危惧種の二ホンザリガニが。
※持ち帰りは厳禁



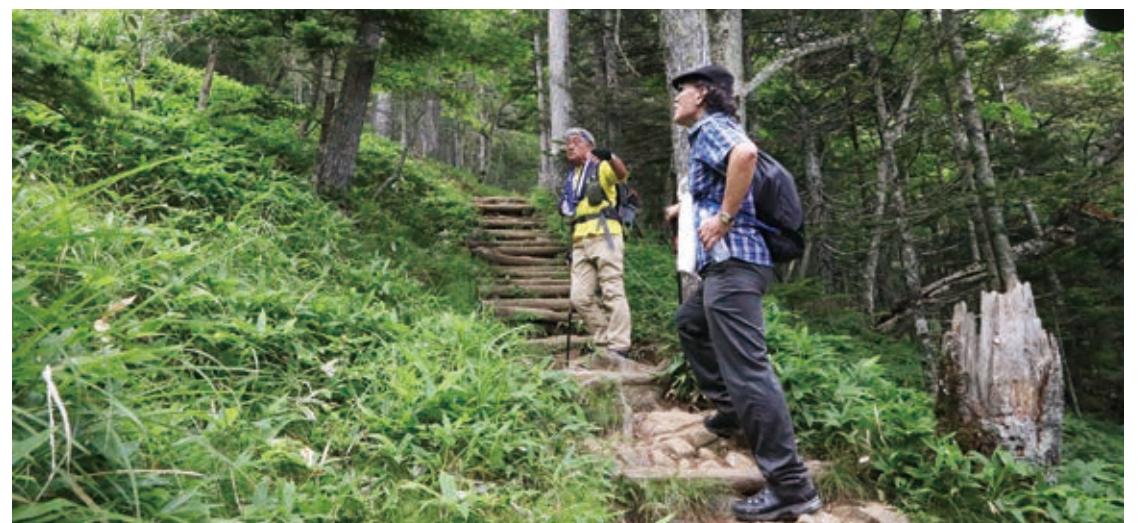
アポイの自然が、心と体を解き放つ。



ジオパークとは特殊な自然環境や歴史文化に触れる「大地の公園」。



3合目でクマ除けの鈴を盛大に鳴らす。頂上まであと2.2km、まだ先は長い。



土の下は橄欖岩の塊だ。根を深く張ないので、台風などが来ると木が倒れてしまうという。

空と川、旅はここから始まる

空知の歩みをたどるなら、開拓の歴史の中で大きな役割を果たした石狩川の存在は欠かせない。空知で暮らす人々とその営みを訪ね歩く類さんの旅は、石狩川流域を眼下に収める滝川上空からスタートする。

旅人 Vol.06



「空知の風を感じたくて、窓を開

けさせてもらつたんだ。気持ちよかつたねえ。まるで自分がグライダーと

一体になつたような気がしたよ」

翼が長く、胴体は流線型。エンジ

ンを積まずに重力と気流を利用して

自在に空を旅するグライダーは日本

の航空法上、滑空機と呼ばれる。飛

行というよりも滑翔、つまりグライ

ダーは空を滑つて翔けているのだ。

「地上からは優雅に見えますが、コックピットではパイロットが懸命に操縦しています。大切なのは自分の五感で風を感じることですね」。そ

う話すのは『たきかわスカイパーク』のフライトイントラクター・清水拡智さん。今回はドイツ製の複座機の前の座席で清水さんが操縦し、類さんはその後部席に搭乗した。

空知の取材を始めるに当たり、まずは上空から石狩川とその流域を眺めてもらおうという趣向だったが、果たして、類さんの反応やいかに。

「絶景。ヤミツキになりそう」

着陸後的第一声がこれで、実は類さん、空が大好きなのだ。

ピンネシリから暑寒別岳へと連なる起伏に富んだ山々、滝川市街の整然とした街並み、森林や田畠の生命力に満ちた緑、そして豊かな水量をたたえながら大きくうねつて流れていく石狩川の圧倒的な存在感。

眼下の地形が手に取るように分かる500mの上空からは、リアルな大地の実像が見えてくる。

「北海道の空は奇麗で、透明度も抜群だといわれています。内陸部にある滝川は長距離飛行でその全道の空をカバーする拠点としては、最適の位置なんですよ」と清水さん。

動力を持たないグライダーは、空の上では独特的の静寂に包まれる。聞こえるのは風切り音のみ。エンジン音が響いて声が通らない小型飛行機との大きな違いもある。

広い北海道を行きつ戻りつしながら旅を続けていると、時に空間や距離感の認識を見失ってしまうことがある。そんな時は目を転じて、空を見上げてほしい。青空を背景にグラウンドの白い機体が音もなく舞ついたら、そこはきっと空知だ。

行きつ戻りつ 時空旅行 小樽



北海道を代表する港町・小樽で、時を巡つて行つたり来たり。隆盛を誇つた炭鉄港の足跡をたどり、地元の酒場の人と大いに杯を交わす歴史と出会いに思いを馳せて、訪ね歩いた類さん流の小樽旅行記。



歩きに歩いてどこまでも、歴史と出会いの小樽旅。

日本銀行旧小樽支店金融資料館は庄重たる明治後期の建造物。類さんが歩く歩道の傾斜に注目。小樽が「坂の町」と呼ばれる由縁だ。

小樽運河は大正3年（1914）に着工し、同12年（1923）に完成した港湾施設。その頃は沖合に停泊した大型船との間は「船」と呼ばれる小さな船を駆使して荷物を運搬していたが、より効率的な輸送を目指し、海岸を埋め立てて造成された。現在は小樽の象徴的な観光スポットとして整備されている。

小樽は絵になる坂の町。多くの文学や映画、漫画、歌謡曲の舞台になってきたこの町では、歴史的建造物や景観を共有財産と

して保全していくという機運が脈々と受け継がれている。例えば旧手宮線跡地を散策してみると、観光客の姿だけでなく、地元の人たちが生活道路として利用している姿がある。

類さんもじっくりと時間をかけて巡るのは久しぶりのこと。今回は往時の繁栄の記憶をたどり、懐かしい人々との再会を果たす。もちろん新たな出会いや、後志らしい美味と酒もたっぷりと。夏の小樽を隅々まで歩いた、類さんならではの旅にご同道あれ。

まさに一望。天狗山の展望台からは小樽の町並みと港の全貌を見渡せる。



劇的な浮き沈みを繰り返してきた鰯漁で栄華を極めた。しかし昭和30年ごろ、この魚はなぜか突然、近海から姿を消してしまう。急速に近代化を推し進める明治政府は、空知地方で炭鉱を開山。その石炭を運ぶために莫大な予算を投じて鉄道や港を整備した。小樽には当時の産業遺産が多数残されている。昭和から平成にかけては、観光ブームだ。国内の旅行客からインバウンド客へと、時勢に合わせてターゲットを変えながらも、観光を産業として成立させてきた先駆的なエリアであることは論をまたないだろう。

これらの時代ごとのさまざまな痕跡や記憶が幾層にも積み重なることで、ロマンとノスタルジーあふれる独特的の町並みが形成された。

句会やテレビ番組の収録などで何度も足を運んでいる類さんにとっても、思い出が詰まつた大切な町だ。

※ 近代北海道を築く基となった三都（空知・室蘭・小樽）を、石炭・鉄鋼・港湾・鉄道というテーマで結ぶことにより、人と知識の新たな動きを作り出そうとする取り組み。

小樽ほど、時代の趨勢に翻弄され、江戸時代から明治、大正にかけては鰯漁で栄華を極めた。しかし昭和30年ごろ、この魚はなぜか突然、近海から姿を消してしまう。

江戸時代から明治、大正にかけては鰯漁で栄華を極めた。しかし昭和30年ごろ、この魚はなぜか突然、近海から姿を消してしまう。

北都・札幌を かたちづくるもの

明治期に北海道開拓の拠点が置かれて以降、
目まぐるしく変貌を遂げてきた札幌市。
その大都の成り立ちを知り、
開拓期の歴史を訪ねると

札幌をかたちづくった原点が見えてきた。

約197万人もの人口を擁し、
北海道の政治、経済の中心地として
発展を続けてきた北の大都・札幌
市。類さんとの札幌逍遙は、その歴
史をたどることから始めてみたい。

北海道の他地域と同様、札幌周
辺にも先史時代から人が暮らしてお
り、近世・近代のアイヌ文化期には、
アイヌ民族のコタン(集落)が点在し
ていた。江戸末期、松浦武四郎の推
薦により、幕府が北海道開拓の拠点

に札幌の地を選定。大友堀(現在の
創成川の一部)を作った大友亀太郎
など、各地からの移住者による農業
開拓が盛んに行われた。とはいって
その規模は微々たるものであつた。

明治2年(1869)、札幌に開拓
使が設置され、本格的な市街地整
備が始まる。大規模開拓に成功した
アメリカからホーリース・ケプロンやウイ
リアム・S・クラークなど多くの御雇
い外国人を招き、都市建設や近代
産業の導入、人材育成に力を注いだ。
そんな開拓期の象徴ともいえる建
物が、"赤れんが"の愛称で知られる
『北海道庁旧本庁舎』である。明治
19年(1886)、北海道庁が設置
されたことに伴い建設され、同21年
(1888)に竣工。アメリカ風ネオ・
バロック様式の豪壮な建物で、軟石
やれんが、木材など建材の多くは道
産材が使われている。塔頂部までの
高さは33mあり、高層建築がほと
んどない当時は、まさに威風辺りを
(1909)に火災で内
部と屋根を焼失するも、外壁のれん
がのように聳えていただろう。

明治42年(1909)に火災で内
部と屋根を焼失するも、外壁のれん
がのように聳えていただろう。

ビル群の狭間に、
開拓時代の
面影を探す。



旅
人
類
Vol.08



国内最古の時計塔として、今も鐘の音を
響かせる『札幌市時計台』。



平成24年(2012)からの5年に及ぶ改修で、
建築当時の姿により近づいた『豊平館』。

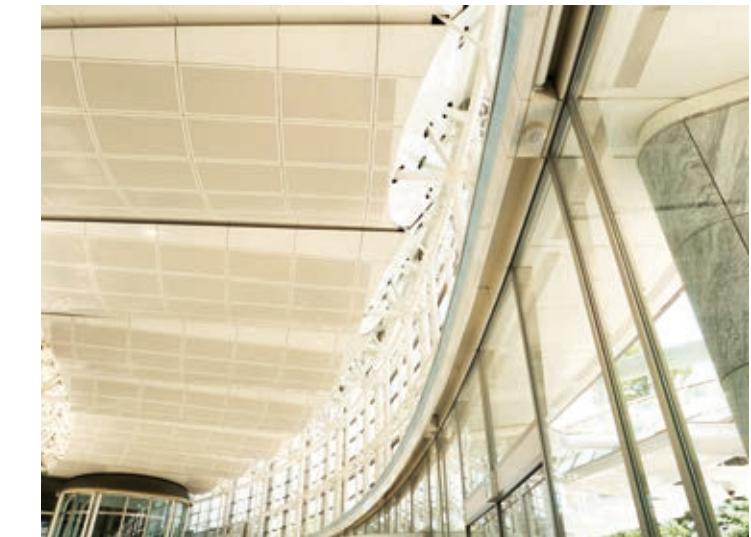
がには損傷がなく、同44年(1911)
に再建。昭和43年(1968)、北
海道100年を記念して創建時の姿
に復元され、同44年(1969)に
は国的重要文化財に指定された。

札幌市内には北海道庁旧本庁舎を
はじめ、札幌農学校(現・北海道大
学)の演武場として明治11年(18
78)に建てられた『札幌市時計台』、
開拓使の貴賓用ホテルとして明治13
年(1880)に完成した『豊平館』と、
開拓期の建物が現存している。歴史
を重ねてきた建物を巡り、「札幌胎動
の息吹が、まだ残っているね」と類
さん。開拓の熱気を肌で感じていた。

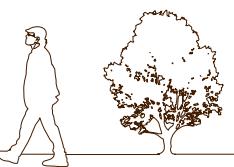
最新号のVol.08では、多彩なコンテンツで札幌・石狩の魅力を紹介しています



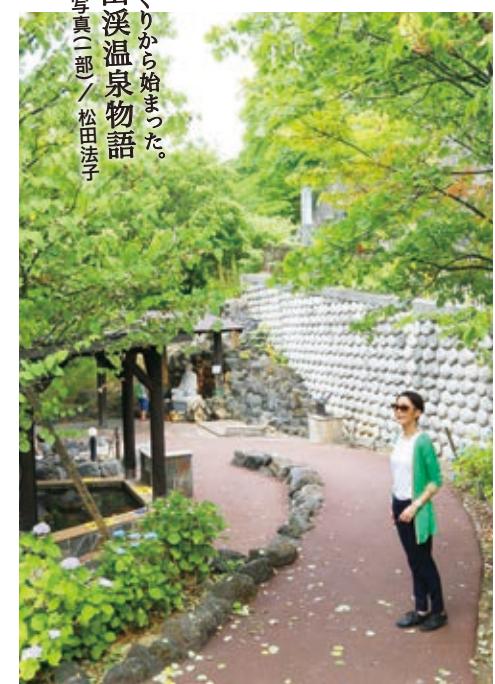
兄弟ユニット『Q. B. B.』が行く!
札幌&近郊、
シブき嗜みしめ巡礼旅
文/久住昌之 イラスト/久住卓也



ニシカワ ヨシエが切り撮る
SAPPORO



定山渓温泉物語
文・写真(一部)/松田法子



札幌の
ディープ
酒場街をゆく
文・写真/藤木TDC



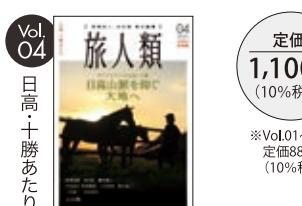
早逝した戦前の画家・三岸好太郎と
その偉業を伝える美術館

文・写真/巖谷國士



大人の北海道旅情報誌「旅人類」好評発売中!
酒場詩人吉田類がナビゲート。

吉田類さんが北海道をじっくり巡る大人の旅ガイド。
その土地の歴史や文化、大自然の恵みに触れる、
地元の人々に長く愛される酒場を訪れる、
今までになかったディープな旅を提案します。



発行/株式会社 共同文化社 企画/株式会社 ドーコン(総合建設コンサルタント)
【amazonでも購入できます】詳しくは [アマゾン 旅人類](#) 検索

発行エリア/札幌圏および道内各地・首都圏の一部書店